紹介

○園太暦卷一

太洋社刊行

吉野朝時代が國史研究の一つの「山」である事には誰も異論があるまいと思ふが、しかも此時代を研究するため根本史料に乏しい事は、我、人、共に三嘆する所である。纒つたものとしては僅かに太平記あるのみで、其の太平記も悉くが史實を記したとは言へない。勿論、金剛寺文書とか、觀心寺文書とか其他紀和の方面に多く吉野朝の歴史を物語る史料は存在するけれども、何れも一通一通の文書で、それを纒めて一貫した歴史を求め出す事は困難である。

其間にあつて中園太政大臣と言はれた洞院公賢の日乘園太暦は斷然、類書を絶した史料であり、其の中から一貫した歴史を求め得る事も決して不可能ではない。第一、筆者洞院公賢が當時に於いては西園寺家と相並んだ一流の名家であり、公賢その人が持明院統の朝廷に於いて、吉野朝廷の北畠親房に匹敵すべき代表的な識者であつた事を考ふる時、其の日記の史料としての價値が如何に高いものであるかは言ふを俟たないであらう。よしやそれは京都側の日記であつて吉野の朝廷の事を知るには不充分であるにしても、到底その内容は近衛道嗣公の愚管記とか中院通冬公の中院一位記などの如き簡素なものではないのであつて、何としても無くて叫はぬ史料である。そして其の日記は應長元年二月、公がまだ廿一歳で正三位權中納言兼左兵衛督の時から始り、延文四年十二月廿九日(四月十六日出家)まで五十年に亘る長い間の記錄であつた。そしてそれは百二十餘卷の大部のものであり、どうやら具注暦の表面に非常な能書で達筆に細々と書き込んであるし、若しその具注暦の行間に書き餘つた場合は裏面に書き續ぎ、なほ足らざれば、暦を切り續ぎ別の紙を補つて記したものであつたらしい。

所が其の原本百二十餘卷は大納言入道公數の時に千餘疋の價で中院通秀公に引き取られ、其後三條西實隆公が周旋して全部を八百疋で御所に御納めを願ふ事になつたが、其時應長元年の第一卷だけが中院家で紛失して見えなかつたので殘りの百二十三卷が、めでたく御物に加へられる事となつた。所が其の紛失した一卷といふのが後に中院家に紛れたまゝ殘つて居つたのであつたが、轉々して今は神田喜一郎君の秘藏する所となつた。

然るに他の百二十三卷の行衞は全く不明であつて世に所謂園太暦なるものは、甘露寺親長卿が長享元年四月から翌年九月五日までを費して、公賢公の原本を抄錄したもので三十四册に編次したものである。故に正本の俤を傳へたものでなく、正しく言へば園太暦抄なのである。しかもその抄錄された園太暦が轉寫さるゝうちに、いろ〳〵の錯簡を生じ、ために園太暦の定本を作る事が

至難とされ、從つて園太曆の刊行は度々計企された事もあり、久しい以前から今にも公刊さるゝやに言はれたが、底本の作製容易ならざるために、今日に及んだ。

所が續群書類從の刊行を完成して幾多の經驗を積まれた太洋社の太田藤四郎氏は敢然園太曆公刊の難事業を企て計畫以來多年の苦心と困難打破の結果、いよ〳〵實行され、近く其第一卷が發行さるゝに到つた。本卷には最初に應長元年二月三月の神田本の正本をそのまゝに收め、それから康永三年正月から貞和二年五月までを纒めて居る。其の初めに收められた應長元年二月三月の一卷が上梓された事だけでも非常な慶事であり、これによつて園太曆の正本と抄本とが、どんな關係になつて居るかを充分に比較研究する事が出來るであらう。そして比較すれば、正本の全部が現存したら、どんなに難有いだらう、としみ〴〵と思ふのは、吾人のみではあるまい。更に引續いて公刊され全部で五冊になる豫定と聞く。

校正は、曩に京都帝國大學に職を奉ぜし時より園太曆の研究に意を用ひつゝあつた現史料編纂官の岩橋小彌太氏が當られてから全く安心する事が出來よう。

幾多の新知見がやがて本書から現はるゝであらう。東京市豐島區池袋二丁目一〇〇八、太洋社發行、一冊豫約價四・五圓〔中村〕

○書紀集解　卷上

——國民精神文化文獻第五、首卷共四分冊の中——

河村秀根著

最近、我國民精神文化史上特に貴重なる史料の複製複刻を企て學界に多大の貢献を爲しつゝあつた國民精神文化研究所が、先に公刊の運びとなつた「日本書紀纂疏」のあとを追ひ、「國民精神文化文獻第五」として新らしく世に贈られたのが本書である。

著者は通稱を復太郎、號を葎菴と云ひ、享保八年尾州藩の國學者河村秀世の次男として生を享け、福本八十彥多田義俊等の神道國學者に師事して、藩學天野信景、吉見幸和の學統を繼承祖述した碩學である。延享、寛延の頃、兄秀穎と共に「日本書紀撰者辨」「神學辨」「神祇令集解」の大著を編述して夙に學名を馳せてゐたが、その後間もなく日本書紀註釋本の編述を志し、之に從事する事三十有餘年、天明の初、年六十三にして此の偉業を完成したのである。（國民精神文化、二ノ一、吉田三郎氏、「河村秀根とその遺著」、參照）。

本書は書紀及び國學研究上缺くべからざる史料である、がその複刻公刊の事は、同研究所々員西田直二郎博士、同助手中村光氏同吉田三郎氏等の苦心の手になるものであつて、從來の流布本天明五年の木版刊本を底本とし、現在市立名古屋圖書館に所藏せらるゝ著者自筆稿本を參照して校合したものである。